
なつこいごっこ ～レモン・レモン・レモンパイ～

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なつこいごっこ ～レモン・レモン・レモンパイ～

【Nコード】

N7825E

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

故郷を家出同然に離れて早6年。勉強して、恋して、仕事して。頑張つて来たはずなのにふと立ち止まり。気がついたら何も残っていない彼女。そこに届いた同窓会のハガキ。それは10年以上前の懐かしい初恋の香りを運んで来た。

1話 同窓会のハガキ

それが届いたのは7月も終わりに近づいてからの暑い日の事だった。

「同窓会かあ。」

実家から送られて来た茶封筒。その中に入っていた往復ハガキ。2通。1つは全学年の同窓会で、1つはクラスの同窓会。

「なつかしいなあ。」

みのりはその言葉を飲み込んだ。

全学年のハガキには

“タイムカプセルを開けます。”

の文字。

「10年かあ。」

今度は言葉になった。それは遠い昔の暑い日で、300人ちよつとの人数が校庭に集まって、クラス代表が庭に手作業で埋めていった大きな水瓶。確か蓋には油紙を巻いたのだ。それから土を被せてその様子を何となくわくわくした気持ちで見えていた事を覚えていた。

15歳の彼女は10年未来の自分がいるなんて思ってもいなかった。ただ何となく

“音楽で生活したい”

そんな夢だけを抱えていた。

予定では8月15日の午前中に

“瓶開け”

をして、それからお昼ご飯、つまりは宴会に流れ込むという。そして夕方からはクラスの同窓会だ。

クラスのハガキには

“どこに住んでいるか分からなくて、とりあえず実家に送ります。

”

の丸文字。幹事は当時クラスの中心的存在だった女の子と男の子。実は苦笑した。どうやら自分は

“行方不明者リスト”

に載っているらしいって。でもそれは仕方の無い事だった。もともと地味な存在で。高校を卒業してからは、親の反対を押し切って上京し。当時仲の良かった友達とも疎遠になってしまった今日この頃だ。連絡をさぼった訳じゃない。ただがむしゃらで、東京での生活に必死だった。ここに来れば、何でも叶うって信じて、頑張れば報われるって本気で思っていたはずだった。だから新しい人間関係に力を入れた。

通っていた音楽の専門学校には皆勤賞で通った。おかげで本採用就職ができたって、彼女は本気で思っていた。

友達から誘われたコンパには基本出た。だから男女関係なく、友達はいるって思える。

バイトもした。同期で入った子がサボりがちで、その分代わりにシフトに入った事もしょっちゅうだった。お店のマスターが

「内緒ね。」

ってまかないの食事に彼女の大好きなデザートをおまけしてくれたものだった。

世の中良い人ばかりだって信じてた。このまま人生が進むって事を疑わなかった。

それなのに。彼女はがらんとした部屋を見渡した。

積み上げられた段ボール。フワフワと浮いている埃のかたまり。

それから分別されたゴミの大きな袋達。行き場が無くなった景品のぬいぐるみ。

2LDK の部屋に一人は寂しかった。

故郷の夏は涼しい。ここから電車で3時間少しの距離だと言うのに、そこには緑が茂り蝉の無く森が有った。

彼女が故郷を思い出すのは、いつだって夏だ。中学の頃、走っていた。ただひたすらに炎天下の校庭を走っていた。彼女は陸上部。長距離の選手。直射日光の照り返しの中、真っ黒に日焼けしながら走り続けた。何も考えず、真っ白になりながら、それでいて自分の

中に息づく不思議なリズムを求め、足を動かした。その場所だけが暑かった。

高校になると生活が一変した。陸上部では結果が求められる様になり

“ 走るのが好き ”

なだけの彼女には行き場が無くなってしまった。記録が全てだった。そして彼女の陸上生活は中学でピリオドを打ち、もう1つの可能性だけがみのりの支えになる。

彼女の中で目覚めたのは音楽。家の近くのジャズ喫茶で教えてもらったバスの響きに酔った。帰宅部に入り、あしげもなくそこへと通う。必然周りは大人ばかり。いつしか同級生とは遊ばなくなり、彼女の高校生活は学校と言うより、実質夜の方が長くなった。東京に近いとはいえ、田舎。彼女は変わり者の烙印を押され、それでも良いって開き直り。それから自分の

“ 可能性 ”

目指して上京する事になる。

「それも来月まで、か。」

ぬるくなったアイスコーヒーを飲み干し、

「はい、出席、つと。」

鉛筆で大きな丸を書いた。

来月からは地元で暮らす。その為にも少しぐらい情報を仕入れておかなきゃって思った。なにより、懐かしい顔に会って今の自分を慰めたかったのだ。

つづく

2話 6年間

何しろ少し違う家庭だった。と言ってもありきたりに。彼女が小学校の頃母親が亡くなり、2年後の中学1年生の時に父親が後妻を迎えた。弟は2歳年下で普通。新しい母親は可もなく不可もなく。みのりは思春期にありがちな距離を取りながら家族とつき合っていたはずだった。ただ一人、父親を除いては。

『女の子なんだから。』
とか

『普通にしている。』
と言われるのが嫌だった。

「母さん、あの人なんとかしてよ。」

彼女は義理の母に愚痴を言っていた。いちいち分かった様な口で干渉されるのが堪らなかった。

『父親の言う事が聞けないのか。』

女と言う生き物がまるで何も考えられない様な口の聞き方をされるのが大嫌いだっただ。

日焼けをみつともないと責められた。

『嫁にいけなくなる。』

と。まるで結婚しない女が出来損ないみたいな口調だった。

それは高校に入ると増々ひどくなった。

「父さんは古いんだよ。」

ジャズ喫茶に入り浸る事を止められた。絶対に喜んではくれないって分かってたから内緒にしていた事なのに。近くに住むおばさんが
“ 気を聞かせて ”

父親に進言したらしい。

『みのりちゃんは今音楽家にもなるのかしら。子供のくせに大人に交じってジャズなんかやって。凄いわね、横山さんちの教育方針は。』

その晩は遅くまで説教をくらった。

「父さんだつて若い頃は聞いてたくせに。」

家には古いスイングジャーナルとテナーサックス。

「それとこれは違う。お前は女の子だ。分かっているのか？」

そして致命的だったのは、彼女が作るレモンパイを父親が嫌いだと言ふ事だった。

『こんなバター臭いもの、日本人の食べる者じゃない。』

それは彼女の母親の十八番の焼き菓子だった。国産のレモンとレンゲの蜂蜜、カスタードクリーム。さくさくのパイに、大切なのは焦げたメレンゲ、粉糖。

その事は義理の母も弟も知っており、それでも

「美味しい。」

と食べてくれた。

「いつその事パティシエになれば良いのよ、みのりちゃん。」

それなのに、父親だけはゴミ箱に捨てた。

その時彼女が決心したのは

“こんな家、出て行つてやる”

という事だった。そしてそれは現実になり。

こつそり専門学校も受験した。代々木にある小さな音楽学校だ。

『経理の専門学校に入る。』

そんな嘘をつき。結局全てバレ、逃げる様に先輩を頼つて上京した。

『いつでもきていいよ、住まわしてあげる。』

つて言われてそれを信じて。

でも結局、他人を頼っていたらそんなに上手い事はいかない。現

実は先輩の彼氏の舐める様な視線。それから3人揃つての沈黙。

保証人がおらず借りられるのは安いウィークリーマンション。それから自炊とも言えない寂しい食生活。

転機が訪れたのは上京して3週間後。学校も始まり、バイトもスタートし一人で生きる事がどれほど辛いか身にしみ始めたその季節。

『同居人、募集』

その張り紙を見た。天の助けだと思った。そして知り合ったのはひよろりと背の伸びた中世的な男の子。優しげな表情に、少し長めの髪。

「あゝ」

彼は困った様な声を出しながら

「迷ってる。」

と言った。部屋は2LDK。以前ルームシェアしていた男の子がホストをしていて、トラブって逃げたのだという。

「正直家賃8万キツイし、でも女の子一緒ってのは、どうも……・どうしたら良いかなあ。」

でも彼女に選択肢は無くて。

「お願い！あたしどこにも行くところなくてさ。」

彼を拝み込んだ。横山みのりは18歳。まだ夢は叶うって信じていた。頑張ればなんとかなるって。

「掃除もするし、洗濯もするし、ご飯も作るよ、だからね、お願い！」

「いや、そこまでしなくても。」

彼は苦笑した。

「部屋は一部屋使っていいから、月に4万円と光熱費。折半ね。」

少年はみのりより1つ年上の19歳。

「俺、おばあちゃんっこでさ。」

と話す彼は

“老人福祉”

を専攻していると照れくさそうに笑った。そのはにかむような笑顔は、彼女に懐かしい人を思い出させた。

それから後は順調だった。

彼の20の誕生日、一緒にシャンペンを開けた。二人でじゃれながら一緒の朝を迎えた。お互いの心に抵抗が無く、この幸せがいつまでも続くって思えた。

それなのに。

彼女が就職した幼児向けの音楽スクールが潰れたのだ。その上彼はフリーターだった。別に好きでフリーターをしていた訳じゃない。ただどうしても

“本採用”

を取れるほど世の中は甘くはなく、また取れたとしてもパートよりも時給が安い、過酷な24時間労働が待っていた。それじゃあ生活できないから。

「俺たちって使い捨てだな。」

彼が言う。

「うん、そうだね。」

みのりが呟く。そして何気なく、彼女は言っではいけない言葉を口にしてしまう。何しろ4月に父親が倒れ、実家に戻るべきかそれともここにいた方がよいのか、彼女自身がぎりぎりの心理状態だったのだ。

「公務員だったら良かったのに。」

それは禁句のはずなのに。彼はいくつかの地方自治体職員試験を受けていた。

『俺は平凡な暮らしでいいや。』

と話す彼のささやかな願いは

“田舎でのんびり暮らす事”

でもこのご時世、そんな平凡こそが高いハードルだった。

「そうだよな。」

彼はうつむいた。

アパートの契約は8月で切れ再更新となる。

「更新、しなかった。」

彼は7月に入った梅雨の夜、彼女に話した。

「俺たちももう限界だよ。」

と。彼はほんのりと笑っていた。

「実家に戻って跡継ぐ事にした。今の俺はみのりの事幸せになんてしてあげられないし、お前はお前で幸せになって欲しい。」

と。彼女は素直に頷いた。未練が無い訳じゃなかった。でも、絶対に引き止めたい決定的な何かにかけていた事も確かだ。「そろそろ潮時だったよね。」

つて。
みのりはもう25。上京して6年以上が過ぎていた。

つづく

3話 帰省

本当に実家に帰るのは6年ぶりだった。

「変わってない。」

その事がとても不思議だった。義母は

『面変わりしているから驚くわよ。』

と言っていたのだけれど。

確かにバス停を降りてからの道の舗装は良くなっていた。以前よりも玄関のサッシが傷んでいる気はする。それに観葉植物も増えている。それに家そのものがしぼんで見えた。なのに、変わらない。それは家という実体を見ていると言っより、軽いデジャブのようだった。

「ふうつ。」

玄関を開けるのには勇気がいった。なんて言って入ろう、そう思いながら結局

「ただいま。」

と声をかけた。

「今、帰りました。」

扉を開けた瞬間、風が吹き抜け激しく風鈴の鳴る音が響いた。

父親は小さくなっていた。

「先月退院したばかりでまだ落ち着かないのよ。」

義母がお茶を運んで来る。以前の彼は畳の上にあぐらが定番だったのに、今みのりの目の前にいる父親は座椅子とでも言っのだろうか。低い椅子に腰掛け、重力に身を任せているかのように肘あてに両手を置いていた。その肩の落ちた姿は56歳という年齢より老けて見え。

「それでも経過は順調なのよ。」

脳梗塞の割には後遺症が少なく、杖さえ有れば自分で歩けるし、自

分の事は自分で出来るという。

「でも、会話がね。」

彼女は言葉を濁した。言語中枢と言う所が犯されていて、話しかけられた言葉がよく分らず、話す言葉を頭の中で組み替える事も苦手だという。それでも

「ねえ、おとうさん。みのりちゃんが帰って来たんだから。お帰りなさいくらい言ってよね。さあ、お帰りなさい、ね？」

と義母が話しかけると、ぎこちない表情が

「お・か・え・り。」

と動いた。

いたたまれず顔を背け

「ありがとう。これからまた、よろしくね。」

そう言うのが精一杯だった。

昔の

“強い父親”

の姿はみじんも無く、そこにいるのは見知らぬ老人のようだった。

実際には8月いっぱいまで東京にいる予定だった。引っ越しの手配も有ったし、中途半端なバイトのシフトが上旬まで詰まっていた為だった。今日だってバイトを終えてその足で直行したのだ。

「ふうっ。」

彼女はほろりくさい自分のベッドに仰向けに倒れこんだ。見慣れた天井に、日焼けしたポスター。

「有るだけましたよね。」

みのりは呟いていた。自分の部屋なんてとうに物置小屋になっていると思っていたのだ。

今日は8月12日。同窓会まではあと2日。

不意に思い立ち、本棚の前に立つ。

「無いじゃん。」

探し物は中学の卒業アルバム。とりあえず小さくはないはずで。

「おかしいなあ。」

卒業してから一度も見えていない代物だった。それからやっと見つけた小豆色の表紙。エンブレムは何とも言えず古くさく、

「芋っぽい。」

彼女は呟いていた。

いやに重たいその表紙はフィルムが張り付き、ベリバリと派手な音を立てる。

「懐かしいなあ。」

そう言いながら、どこか自分の記憶していた中学の時代との違いを感じ、戸惑った。アルバムの中の彼女達は、10年前の輝き。当時、一番流行っていた髪型に短いスカート丈。じゃれ合いながら、ポーズとって。

「あつ。」

その影に自分を見つけた。真っ黒い髪と、日焼けでテカる頬。普通丈のスカートから伸びるによつきりとした足。それから大股開きのジャージ姿に、両手ピース。

「うああつ。」

もの凄く、恥ずかしかった。

「あたし、何見てんだ？」

自分で開いたアルバムだったはずなのに、妙に赤面しながらうろたえた。これを見ようと思ったのは、同窓会に出席するのに、友達の顔をすっかり忘れているのは都合が悪かったからで。昔の恥ずかしい写真を掘り出して羞恥心に浸る為じゃなかった。

とにかく最初の目的を達成しようとした次のページをめくる。するとそこには、どうしてだろう。とうの昔に忘れ去ってしまったはずの少年の姿が有った。

丸刈りの頭に、真っ白いシャツ。ひょろりと伸びた体と、手に持っているのは鈍い光を放つトランペット。

「やつちゃん。」

彼女はそのまま撮られたピンぼけの写真の彼を鮮明に思い出し

て
い
た。

じ
じ
く

4話 小鳥（前書き）

人が亡くなる事を表現する文があります。
お嫌いな方は回避して下さい。

4話 小鳥

仲は良かったと思う。思春期を迎え男女の仲がシビアになり始める中学の時代、噂にならない程度につき合っていた。と言っても友達と言う意味で。良く有るグループってヤツだった。メンバーは四人。いつも明るいナツツに、彼女の幼馴染の尚史^{ひさし}。尚史の友人の泰^や史^{すし}にナツツの友人のみのり。

尚史はナツツ同様弾けていて、それにつき合わされる泰史は

“ 泰史・尚史 （やすし・ひさし） ”

などというお笑いコンビを組まされ、突っ込み役をやらされていた。その不器用さを笑いながら、みのりは

“ 彼の事が好きかもな。 ”

なんて思ったものだ。

彼は吹奏楽部。トランペット吹き。少し癖のある低音を聞きながら、彼女はいつも校庭を走っていた。

てっててって。大地を刻みながら、そのリズムが体の中に染み込む。タイトルは知らない、でもどこか懐かしいクラシックの音を聴きながら、熱と音で満たされる。

中学2年ともなると、特に女の子達は傾向が別れた。当然と言う顔で色恋にとけ込むか、反対に疎遠になるか。みのりはどちらかというと後者で素知らぬ顔を通し。でも本当は彼女だって興味津々だった。

「脇の手入れしなきゃっ。」

って騒ぐ同級生の話しに耳をそばだててみたり、何となく彼に臭いって思われたくなくて

“ 制汗剤 ”

つてのをこっそり買いに行ったりもした。長い時間どの香りにするか悩んだ挙げ句選んだ無香性のボトルは、机の一番上の引き出しに仕舞ってあり。

ごく普通に友達だから、そう言う展開って有り得ないよなって思
いながら、どこかに淡い希望が残った。

ナッツも尚史も仲のいい友達は彼女を

“みのりん”

と呼んだ。ただの同級生は

“横山さん”

だ。でも彼だけは

“横山”

で。その中途半端な響きが、彼女に期待を持たせた事も確か。

彼は優等生だった。かといって目立つ訳ではなく、もの静かで。

短い黒髪に、いつでも真っ白いシャツを着て。何よりも清潔で。暑
い朝の始まりに教室に入り鞆を置く彼から香る石けんの香りが、彼
女をどうしようもなくいたたまれない気持ちにさせていた。

嫌だなんて。自分だけが空回りしている気がした。

きつと彼にそんな気持ちなんか無いし、決め手も無く

“好きだ”

と感じてしまう心が、何だか汚い様な気がした。

だから彼が思っている事には目を向けない事にした。二人は友達。
彼女の身長は 158 cm。それに体重 51 kg は陸上を
している人間としてはあまりに太り過ぎで。色も浅黒く、髪も日焼
けで傷み色が抜け、爪を磨き早熟で艶めいたほっそりとした足を持
つ同級生達と比べるとあまりにも情けなく、そう言う目で見られた
時、むしろ自分はアザラシだと思った。本物のアザラシだったら可
愛いっていつてもらえるかもしれない。でも、アザラシじゃあ好き
にはなってもらえないって。

そんな彼女だから

“恋愛”

なんてまだしたくないって思った。

やっちゃんの身長は彼女より少し高い。春に覗き込んだ

“身体測定結果”

の体重にいたっては2キロも彼女の方が重かった。

『見せたんだから見せる。』

と言われ、必死になって逃げた。それは男の子同士のじゃれ合いの様なもので、でも、後から思い出す彼の笑い顔に、胸の辺りが

“ 本当に ”

痛くなつた気がした。

そんな6月のある日の夕方、彼女は困つた様に学校の玄関に佇む彼を見つけた。

「どうしたの？」

その曇つた表情に何かが有るのは分かった。そして彼の掌にはふつくらとした小鳥。

「可愛い。」

彼女は思わず顔をほころばせた。

“ ちい ”

とだけその子は鳴いた。そして弱々しく羽をばたつかせ、それまでだった。

「どうしたの？」

変だつて思った。

彼は校門の所で拾つたと答えた。

「どうすればいいかなあ。怪我、してるみたいでさあ。」

彼は小鳥をそつと撫でた。当時彼女は飼育委員をしていたから。

「すぐ見てもらおう。」

それ以外考えが浮かばず、無造作にやつちゃんの手を取って歩き出していた。目的地は用務員室。

「田中さん、いる？」

そのおじいちゃんは古株で、この学校の事だつたら何でも知つていて、その上飼育係の先生よりもっと生き物に詳しかった。

「これは、キビタナだな、珍しい。」

おじいちゃんは首を傾げながら言った。

「どこで見つけたんだい。」

あまり見かけない野鳥だという。それから小鳥を返す返す見つめた。
「病気？」

彼の代わりに彼女が尋ねた。

「いや、これは。羽が折れているというか、うゝん。」

おじいちゃんは少し間を置いた。

「怪我をして、それから食べれずに病気になったってところか。」

「治るの？」

その小さな鳥が弱々しくも

“ 生きている ”

事に

“ どうしてだろう ”

という違和感が浮かんた。

彼女は母親が病室でなくなる時に立ち会っていなかった。親戚一同がそれを止めたからだ。そして最後に会ったのがいつだったか忘れかけた時に、白い布を被った母親と対面した。その日の記憶はつい昨日の事の様だった。母親は少し痩せたものの、生前の姿そのもので。もともと色の白い人で、病弱で。綺麗な姿は亡くなってしまつてからでも変わらず、死んだ事を悔しく思いつつも、死んでもなお美しい母親を誇らしく思った。その奇妙な感覚を覚えていた。

魂とか命って目に見えないから。でも、目の前の小鳥は確かに生きていて、そのくせ危うくその命を手放そうとしている様に見えた。ふと、やつちゃんのおばあさんがこの春に亡くなっていた事を思い出し、みのりの中に沸き上がる想いが有った。命は、命だつて。

「助けられない、か、なあ。」

出来る事をしてあげたかった。でもその頃の二人は、獣医に小鳥を見せようと言う知恵も無く、お金もなく。

ただうなだれる二人を見て、用務員のおじいちゃんはこう提案した。

「良かったらここで面倒を見てあげようか。」

と。

「出来る限りの事はしてあげるから。」

その代わり、一日一回は様子を見に来て欲しい、と。

二人は目を輝かせ頷いていた。

つづく

5話 レモンちゃん

仲良し4人組はそれから変わらず程よい距離で遊んでいた。でも、毎朝7：10からの20分間だけは少し違っていて。約束するでも無しに落ち合う誰もいない校舎の一番外れ、用務員室前。

「あいつらには言わないでおかない？」

それはやっちゃんから言い出した言葉だった。

「変に騒いで鳥が落ち着かなくなったら可哀相だから。」

さすがに中学ともなると友達と連れ立って登校する事も少なくなり、その事が二人には幸いし、誰にも勘ぐられる事無く部屋に入り込む。それから

「お早う。」

いつも話しかけるのは彼女の方からだった。

「今日は雨が降るらしいよ。」

一瞬の事とはいえ、彼と二人つきりだって言う状況にみのは緊張し、毎回

“お天気”

の話しを振って様子を伺った。彼は笑って答える。その事にいつもほっと胸を撫で下ろしていた。ああ、今日もいつもと同じ彼だってこんな風にひそひそしていて、どこかやましい気持ちがあるって、何となくバランスを崩しそうで怖かったのだ。

小鳥は少しずつ回復している様に見えた。その子が暮らすのは小さな段ボール箱。

「お早う、レモンちゃん」

しゃがみ込み覗くと、膨らんでいたタオルがもぞもぞと動き、

“ちいっ”

可愛い声が挨拶を返した。彼女が手を差し出すと、その小さなくちばしであまあまと突つかれた。

「今日も元気だね。」

それから掌でそっと包み小鳥を持ち上げた。

「お顔もきれいですよ。良くなって来てるね。」

“ちいっ”

まるで人間の言葉がわかるようだった。

小鳥の名前は

“レモン”

とつけた。二人で決めたと言うのは正確ではなく、みのりが勝手にそう呼び始めただけだったのだが。

『名前つけてあげないと。』

そう言って彼に相談するでも無く、

『首の下が黄色くてレモンみたいな形してるからレモンちゃんでお？』

なんて。やつちゃんは何も言わず笑っているだけだった。

それでも小鳥が

“レモン”

と言う響きに反応する様になっている事を二人は僅かながら感じていた。

最初の頃、朝にエサをあげるのは彼の役目だった。ささやかな小遣いで買って来ていた鳥のエサを取り出し、1つ1つを摘んでその口元で揺らす。パクリと喰い付き、レモンちゃんはさも嬉しそうにくちばしを揺らした。

初めてそのエサを見た時、みのりはぞつとしたものだった。まるでミミズの様な形をしていたのだから。それでも

“気持ちが悪い”

なんて言っちゃいけないって、その気持ちをぐっと堪えていた。それを彼が見ていて、

「作り物だから大丈夫だよ。」

と笑った。それからしばらく経ったある日、彼はピンセットを用意して来てくれた。

「これでやってご覧よ。結構、いいもんだから。」
と。つまり、ピンセットでエサを摘んで与えてごらんと言う事だった。

恐る恐るエサを摘み、彼女は腕を伸ばしながら彼の手中でちんまりと収まっている小鳥の口元までエサを運んだ。何だか怖くって指先が振るえ、それがレモンちゃんには魅力的に映ったのだろう。ぱくりとためらいも無く口にくわえ、頭を上下に揺らしながらきれいに平らげた。

「可愛いかも。」
「だろう。」

意外なほど、そのミミズの様なエサは気持ちの悪いものじゃないって彼女は思った。

それからというもの、彼がエサを与え、その後にものりがピンセットでエサをあげた。小さな鳥で、思いのほか食欲も無く、あつという間に満腹になってしまふ事を少し残念に思いながら、時間は刻々と過ぎていくから。

「はいどうぞ、ママ。」

彼は何も考えていない様子で彼女にレモンちゃんを手渡す。

「ありがとう。」

みのりは受け取りながら、かっとなつた顔を見られたくなくてうつむき、その子を指先でそっと撫でた。段ボール箱に戻すのは彼女の役目だったから。

“ママ”

と呼ばれて恥ずかしかった。家では親を母さんと呼んでいる。それに“レモンちゃんの育ての親”

と言う意味だつて分かっているても、その響きは行き過ぎていっているって思った。だから

『はい、パパありがとう。』

なんて返す余裕はどこにも無く、ただ不思議そうに見ている彼の視線を避けるのが精一杯だった。

用務員室を出るのはいつも二人バラバラ。

「先に行っててね。」

「おう。」

なんて。それは暗黙の了解で。お互い揃って歩いている所を見られ、後で不必要に騒がれるのが嫌だった。

放課後はどうしてもお互いの部活とか委員会の方が優先になる。

だからどちらかというと、飼育委員でもととの付き合いのあるみのりの方が用務員室に向かう事が多かった。そこで仕入れた

“本日のレモンちゃん情報”

を次の日の朝に彼に聞かせながらエサをあげるのが日課になっていた。

それからあつという間に時間が過ぎ、レモンちゃんは順調に回復し、7月に入る頃には学校管理の鳥小屋で生活しても問題ないと言う所まで元気になっていた。

その話を聞きながら、

「良かったね。」

と手を叩きながら、どこか寂しさを感じるみのりがいる事も確かだった。

彼女はやつちゃんの前で

「本当に子供が離れちゃった親みたいな気分なんですけどお。」

なんてふざけてみせた。それ以来二人が用務員室でそろう事はもう二度と無く、静かに元の生活に戻った、そんな感じだった。

それでもその短い期間、秘密の時間をひっそりと過ごせた事は彼女にとってとても大切な思い出になった。

以降、時々鳥小屋の近くで見る彼の影にみのりは小さく手を振り、手を挙げるだけの挨拶に満足していた。

つづく

5話 レモンちゃん（後書き）

書いていて、この頃が懐かしいです。

お盆の帰省シーズンになると、妙に思い出しちゃうんですよね、
中学の “ 青かったなあっ ” て時代をね。

6話 女の子

レモンちゃんは飛ぶ事はまだ苦手そうには見えるものの、自然に鳥小屋の一員としてとけ込んでいるようだった。それを見て二人とも胸を撫で下ろしながら夏休みを迎えた。

9月に入れば世代交代が有り、新人戦もやって来る。それに向けてそれぞれが部活で忙しく、そこでの友達がいて、毎日を忙しく過ごしていた。

だから彼の事は音楽室の方向から流れて来る音色だけでしか、気配を感じる事が出来なかった。

そんなお盆も近づいたある日の夕方、みのりの家の電話が鳴った。
『明後日、暇？』

ナッツの慌たらしい声。

「うん、暇だけど。」

家の掃除に余念の無い義理の母親を見ながらそう答えていた。

『じゃあお昼、1時に市営プールで。水着と帽子、忘れないでよ。』

つまり、プールへのお誘いだ。

「あつちよつと待つてよ。」

みのりはスクール水着しか持っていないのだ。それも胸元には大きな白い布で

“ 横山 ”

なんて書いてある代物だった。市営プールとはいえ、さすがにこの歳でそれは恥ずかしい。

「あたし、スク水しか無いよう。」

そんな彼女に

『じゃあ、あたしの水着で良かったら貸したげる。昔スイミングスクールで使ってた競泳用だけど、どう？』

なんて言われ、きちんとした競泳用だったらいいかもなっと思って。

「借りても良いの？汚くない？」

『大丈夫よ。私いつも下にスイミングショーツはいてるから。』

その笑い声に、軽い気持ちで乗っていた。

「助かる」。じゃあ、行くね。」

市営プールなんて、小学校以来の事だった。

「そうこなくっちゃあ。そうそう、お手入れ、忘れちゃ駄目だぞ。」

「

そう言われ、彼女はそうだってはつと気がついた。部活ではＴシャツだし、これまであまり気にしていなかったのだけれど、生理が順調になり始めてから、自分の体がぐつと女に近づいて来たって言う自覚は有った。

「忘れてた……。」

みのりはうるたえ、電話口を手で覆った。

「ねえ、どうすればいい？」

だいたいの見当はついて入るものの、何だかよくは分からなくてカミソリを使うって事は聞くけれど、自分がするのはかなり怖かった。

『あたしはカミソリ使ってるよ。』

ナツツも小声で返事をした。

「あたし、初めてなんだけど、怖くないの？」

『大丈夫。Ｔ字カミソリってのが有ってね、石けんつけて、それで撫でる様にやれば怖くないから。』

「Ｔ字かみそり、ね？」

『そう、Ｔ字。』

「でも、本当に大丈夫？」

『大丈夫だって。あたしも初めて時は怖かったけど、慣れると気持ち良いよ。反対に病み付きになって、他のとこまでやっちゃう事あるぐらいだし。』

二人は奇妙な話で盛り上がった。何しろ、思春期。分からない事ばかりで、でも知りたい事ばかりだったから。

その夕方、みのはドキドキしながらいつも行くスーパーより1つ向こうの店まで足を運んだ。もちろん買うのはシェイバーだ。

「種類、有り過ぎ。」

そこには10種類近い

“女性用”

が列んでいて、何だかくらくらした。紙のパッケージにはスタイルのいいお姉さんがビキニを着て笑っていたり、バレリーナみたいな足がきれいに組まれ椅子に座っていたりした。何だか

“こういう人がする事で、中学生の自分には早いんじゃない?”

そんな錯覚を覚えた。それでも明後日。やっぱりお手入れをしていなくて、プールサイドで恥をかくのは嫌だったから。二番目に安いカミソリを、先にかごに入れていたレモンと生クリームとポテチの間に押し込んだ。

次の日、彼女はレモンパイを焼いた。お盆が近い所為かもしれない。時々どうしても作りたくなるときが有るのだ。

父親には作っている事を知られて欲しくなかった。それに、もしかしたら新しい母さんには嫌みかもしれない、そう思っただけに作る事はなく、でも作らないでいると忘れそうで不安もあり。かといってこういうものを一人で食べる事ほど虚しい事は無く。だからせっかく

“食べてくれる人”

がいる明日と言う日は、みのりにとってはラッキーな日だった。

季節が季節だったので、パイ生地は冷凍で済ませた。その代わり、レモン入りのカスタードクリームとメレンゲには気を使い、木目を整え、これ以上無いって位丁寧に仕上げた。

「いいにおいがするわね。」

義理の母は彼女の手元を覗いた。

「お裾分け、もらえるのかしら。」

「駄目です。」

二人の中は以外と良いのだった。

「でも、美味く出来そう。」

みのりは残っていたカスタードクリームを彼女に差し出した。

「うん、美味しいわ。」

その人は指先をオツケーの印に丸めた。

「これだったらパティシエにもなれるから。」

「まっさかあ。」

そう言われ、まんざらでもないみのりだった。

つづく

7話 男の子

自転車のかごに積んだレモンパイとプールグッズ。それから青空。
「日焼けしそつ。」

彼女は誰に言うでも無しに呟きながら自転車のペダルをこぎ始めた。
目の前に広がるのは雲ひとつない世界。いつも陸上で焼いていた。
でも、プールの日焼けは違うから。

「ゴーグルパンダになったらどうしよう。」

なんて言いながら、それも楽しいかもって思った。

市営プールは山際にある。長い下り坂をおり、再び上り。何も無い舗装道路を抜け、そよ風が吹き始める地点がプールだ。

時間はぎりぎり。パイのラッピングに手間取ったから。結構混んでる駐輪場に自転車を止め

「お待たせ、ナッツ！」

彼女は大きく手を振った。振り返される手に夏休み万歳って思った。
でもその向こう、二人の影が並んで揺れ、彼女は動きを止めた。

「ちいっす、悪いね、みのりん。俺たちも合流しちゃった。」

それは日焼けした少年達の姿だった。

「どうしてよ。」

それまでは何気ないフリを装っていたものの、人のまばらな女子更衣室に入った瞬間みのりはナッツに文句を言っていた。

「聞いていないよ、あいつらが一緒だなんて。」

ナッツは

“ あれえ？”

なんて顔で

「駄目だった〜？」

と笑った。

「昨日の夕方、スーパーに行ったらばったり尚史と会っちゃってさ。」

日焼け止め買ってたから

“どこいくの”

って言われて、プールって言ったんだ。そした一緒に行きたいって言うし。ほら、あいつ弟みたいなヤツだから、面倒見てやるのが当然かなって。嫌だった？」

それから少し首を傾げ

「でもどうして？」

そんな風に切り返されて言葉に詰まる。まさか

“やっちゃんを意識しちゃってて”

なんて言えるはずも無く。

「だってさあ。」

言葉を探しながら

「水着だよ、水着。恥ずかしくない？」

なんて当たらずとも遠からずな答えで誤摩化した。

「まあ、そうだけだね。」

ナツツはいたって平気な顔でプールバックをかき回した。

「あたしは平気。でもって、はい、これ水着ね。」

親友の心がもうプースサイドに移動しているって、みのりには分かってた。だから

「はい。」

だなんて、間延びした声で返事をし、空いているカーテンルームに向きを変えた。

借りた水着は正に

“競泳用”

だった。それはがっしりとしたスクール水着とはまるで違う。

「これ、なんか凄くない？」

何しろ生地が薄い。胸元もそうだし、足の付け根のラインがぎりぎりっぽく

「むちゃ恥ずかしいんですけど。」

彼女は体に巻いていたタオルをちらつとめくって顔を赤らめた。

「そんなもんじゃない？」

ナッツは堂々と仁王立ちでメッシュの帽子を被った。彼女も同じ様な競泳用の水着だ。でもみのりとは違いもと水泳をしている所為なのか違和感が無く似合っている。そのすらっとした姿態を羨ましいと持った。何しろみのりは知っていたから。尚史が彼女の事を好きだつて。多分、ナッツ以外の全員が知っているはずって位それは有名だった。

『どうしてナッツはそれに気がつかないかなあ。』

『みのりも友達なんだから教えてあげれば良いのに。』

なんて言われ

『うっん。』

なんて曖昧な返事をしていた。だって、だってって。気がつかない方が良い事って有るでしょう？

なかなか外に出たがらないみのりの所為で、プールサイドに行った時には男の子二人組はすでに泳いでいた。

「あんたら、準備運動はしたの？」

なんてナッツが腕を振る。

「んなの、してられるかよ」

尚史がばしゃばしゃと水しぶきを上げ二人に近づき水をかける。続いてやって来た泰史がニコニコと笑っていた。

「それより、遅すぎ。もう来てからずいぶん経ってるぜ。」

確かに時計は1時20分を過ぎていて。

「ゴメン！」

そう言いながら結局ナッツは足下からプールに飛び込んだ。勢い近くにあった少年達に水がかかり

「うわっ！」

なんて悲鳴が上がる。

「何すんだよ！」

って叫ぶ尚史の声はまんざらでもない。

「何すんのって、どうせ濡れてるじゃん、全身。」

ナッツの軽やかな笑い声。それから6つの目線がみのりを見上げる。彼女は口をつぐんだままそっと水面に足を入れた。

プールの中、上半身だけ裸のやつちゃんを見る事が出来なかった。彼の視線を感じながら、目を合わせる事が出来なかった。ああ、鎖骨が浮かんでるなって、自分の体とは違うなって思いながら3人の後について回る様に泳いだ。

特に特別な事を意識した訳じゃなかった。第一、恋愛ってことすら分からず、ただ漠然と

“好きだなあ”

って感じていただけなのに。

『女の子の方が早熟なの。』

って言葉が妙に頭に浮かんで離れなかった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7825e/>

なつこいごっこ ～レモン・レモン・レモンパイ～

2010年10月10日14時30分発行